

大正十年十月發行



光明

第九號

第三卷

光明團本部發行

□ び叫の頭卷 □

次 目

卷頭の叫び	………	一
全て生命ある者よ	………	二
悟れこの理を	………	五
蕨の冠	………	七
先驅者ニコライ	………	七
明治維新の志士	………	八
先驅者たれ	………	九
平和來	………	一〇
天下暗愴として妖雲たなびく	………	一二
全てを善意に	………	一三
疑へば皆チボ	………	一三
利己主義の上に立てば	………	一四
天の理に曇は無く、人の心に疑ひあり	………	一五
若き者の祝福は	………	一五
虚榮の惡魔	………	一八
若い女の言分	………	一八
惡い夢	………	二〇
物置の大掃除	………	二三
苦しいけれど離れて見やう	………	二四
團費納附者………	二六	二六
新同胞………	二七	二七
卷末に………	二八	二八

□ 唯合掌して合掌して □

かつては此世を呪つたこともあつた。けれど今、あゝ何といふ美しい地上だらう。あゝ何といふ莊嚴な世界だらう。

見よ！ 川も、山も、空も、そして全ては美しく輝ける色彩と、豊醇なる香氣と、無量の光明とを以つて飾られてある。

この地上の榮光を讃美せよ！ 驚嘆せよ！ 如斯飾れたる地上はこれ祭壇、祭壇に呼吸せる人の子に、全て地上に於ける者を呪ひ、裁き、運命を輕んぢ、自らを汚すことが免されやうか。

人の子よ！ 人の子はこの莊嚴なる祭壇に立つて、唯仰望。たお唯合掌して、大愛の尊さに抱れるとき、汝に不二の白道は示される。進め白道を、唯合掌して、合掌して。

天に聲あり

全て生命ある者よ。

我爾に告げん『我爾を救ふ』と

□
若き其昔は、働きもしたであらう。考へもあつたらう。けれど今はもう、自分の体さへ自由にならない、老衰して、世の棄人にされた時、花も樂しむに足らず、蝶も目にとまらず、育てた子供にまで、いらぬ者の扱ひされる時、其淋しさ悲しさを救ふ者は誰だらう。全ての希望も誇りも快樂も無くなつた、消えゆく寂しみ、無常迅速の悲哀の前に、地上の全てが彼を救ふことが出来やうか。大愛のみ親呼んで曰く『我爾を救ふ』と。

□
彼は、人を殺した。彼は死刑に處せらるべき身上である。彼を、死いふ脅威に恐れ恐

しき罪に泣いた彼を、救ふ道は成功熱をあふつてやることだらうか。勤儉貯蓄を言つてやることだらうか。勉學を奨めることだらうか。何も間にあはない。それでも彼は救れねばならぬ。彼が救れなかつたらどうしやう。地上に住む誰一人でも彼の二の舞はせぬと誓はれやうぞ。彼は救れねばならぬ。其彼を救ふ愛の主は誰ぞ。天に聲あり『我爾を救ふ』と

□
彼は白痴だ。狂氣者だ。見ただけでも云ひやうのない悲しさ、淋しさに胸を打れる。全ての因果を一身に受けて、祈ることも念ずることも、吾人間として暮すことさへ出来ない彼が、いづく其彼こそ第一に、愛にもれてもよからうか。さうした彼の上にさへ及んでゐる愛、その彼を抱いて泣いてゐる愛の持主がなくてよからうか。『衆生苦惱は我苦惱なり』と涙の主は誰ぞ。大愛のみ親は曰く『我爾を救ふ』と

□
若い者が、夜の間もおしんで勉強するそれもいゝことだ。學資のある者、頭腦のいい

者が、大きな理想を抱いて努力することもいいことだ。せつせと働いて、積る財産を見て喜ぶこともいいことだ。けれど學問することも財産を殖すことも、働くことも、これ自身が決して第一義のものではない。人生の第一義は、最も急な、最も深い、欲求は自分を知ることだ。自分とは何か。答へて云ふだろう。人だ。人とは何か。私は暫く人とは何かの。問題を同胞たちに捧げやう。

迷へる者!!!それは釋尊によつて呼れたる私の名である。救るべき者!それは聖親鸞によつて叫ばれたる私の名である。

迷へる者のなすことは、假令萬卷の書を讀まふとも、大山の如き富を積ふとも、位人臣の榮を極めやうとも『萬事そらごとたはごと信あることなし』である。

巡禮に鶴は、親を知らないが故に迷ひ、母親や弓の手にありながら親と知らないが故に泣いたのだ。全て生命ある者は、親を探ねて六道輪廻の旅に上ること此處に幾千劫而して今、地上といふ祭壇に出でて、目に明に見えないけれど、大愛のみ聲はあざやかに『我爾を救ふ』と耳に入つた。莊嚴に飾られたる天地の全ての恵みを受けて、大

愛のみ親を認識した。何といふ嬉しい人生だらう。

※ 悟れこの理を

學問も、富も、名譽も全てそれは第一義ではないと言つた。地上に於いて出來たそんなものが何で我中心生命だらうぞ。

一億長者安田善次郎が兎漢のために斃れた時、そのあとに何が残つたか。一生の内に五十圓の寄附すらしなかつたこと、骨肉が互に喰ひあつたこと等世の中の汚い惡口と、醜い。と、一億の財産とではないか。しかも彼を葬る爲に、一坪の土があつたら上等ではないか。一億圓長者と一代になることなどどうしても、立派な道ばかり行つて出來るものではない。『チユウ〜と嘆き悲しむ聲聞けば鼠の地獄猫の極樂』といふ歌のやうに、商人などで格別に儲ける人などをしてゐることは、一方高く賣れば、買つた方はどうしても泣いてゐるのだ。財産はこれ我者ではないのだ。世界共有の物なのだ。ただそれを一時あづかつてゐるのだ。如何なる長者も如何なる貧しき者も、食ふ

ところは三椀、寝る所は一疊ではないか。萬人の内十人食ふ物がなくて、飢に死した者があらうか。食は飢を凌げば足り、衣服は寒さを防げば満足し、住居は、雨を凌げば感謝すればいいではないか。物質に對する腹のどん底を其處にたくのだ。若し業報によつて持つべく宥されたものなれば、赦された氣持で、所有ゆくのだ。

今の時代は、物質を中心に立てこれを世の中だ。人間の心の脊骨は、愛でも信仰でも藝術でもない。ただ如何にして金を得んかが問題の中心である。けれど、さうした世界は行きつまつた。皆が其苦しさを味はねばならなくなつた。そして再び生命の世界は開けて來た。『日本文化の先驅者親鸞の叫び』日蓮と、親鸞の生命道を活さねば、日本の今は救れない』との叫びが生れて來た。新しき時代の人間は、もう古い物質崇拜や愚にもつかない權力欲などを中心にして動くことを恥ねばならぬ。何處までも自己の生命が出發點でなければならぬ。敬虔に、尊い祈りに、深い懺悔にわななく靈はきつと、『我爾を救ふ』といふみ親を認識することが出来る。



棘の冠

先驅者ニコライ

ロマン、ローランが書いた先驅者の中に、伯林大學の生物學教授として又醫師として有名な、ゲー、エフ、ニコライの評論や、其思想が誠せられてゐる。ニコライ、は先の歐洲戰亂の時、獨逸の軍醫として、最も高い地位を與へられた。彼が若し、榮達や自分の意の安全を思つてゐる人間なら何も言はずにゐたろうけれど、正義の血の餘りに鮮な彼は、獨逸軍の最高幹部や政治家たちの用いる所が、餘に軍國主義的で、餘に人道に叛いてゐること黙つてゐることが出来なかつた。彼はペンを取つて舌をふるつて、如何に獨逸のしてゐることが恐しい罪惡であるかを公然と非難した。獨逸の將軍や政治家たちは、憤つて、ニコライの高い地位を罷免して、唯の一兵卒にしてしまつた。それでもまだたさまらないので、ダンチツヒの軍法會議では、彼ニコライを五ヶ月の禁

錮に處すべく宣告した。彼は如何なる重い刑に處せられるか知れないといふので、飛行機で、デンマルクに逃げ去つた。

『私は立派な獨逸人でなければならぬ。立派な獨逸人たらんために、國を去る』とは其時のニコライの言葉であつた。獨逸が白耳義の中立をおかし、毒瓦斯を用ひ、ルシタニア號をはじめとして多くの商船を撃沈める等、如何なる暴逆も、破倫も、力は正義なりといふ信條のもとに惡魔のやうに行つて行くのを、正義は力なりと信ずる高い理想家ニコライが黙つてゐられやうか。これでは獨逸帝國は亡ぶ！ 彼は書物に書き、大學で講義もした。政府は彼の口をあらゆる方法で封じやうとした。彼はきかない。二年半も一兵卒としてつまらぬ仕事に使はれたのだ。(野尻清彦氏譯)

私は彼の善惡を云ふのでもない。國家と個人との關係を云ふのでもない。ニコライは先驅者である。先驅者の偉大と其悲哀を味はたいのだ。

明治維新の志士

徳川大平三百年、江戸に天下のあることを知つて、京都に天子様のあることを知らない國民の間に立つて、天子様がある！ 天皇の御政治に！ と叫んだ維新の志士は、今日の我々の恩人である、けれど其王政復古を稱へた先驅者たちはどうなつたか。山縣大貳も武内式部も吉田松陰先生も、迫害と、死刑の淋しい一生ではなかつたか。先驅者吉田松陰先生の血をして安政の大獄に斃れた幾多先驅者の血が明治の歴史の根底であることを思ふ時、人類始まつて此方、眞の文化を建設するために、藤の冠に、十字架に、犠牲にされた尊い先驅者たちの偉大な恩に感激せずにはられない。

先驅者たれ

何時の時代でも、何の社會でも、國は國、村は村、時代が行詰り、世の中が腐敗した時には、其處に先驅者が出て、異常な改造をするために、十字架を負ひながら眞先きに進んで行かねばならぬ。

吉田松陰先生は『斯心奮發神明に誓ふ』と云つた。藤の冠りを被らされ、十字架にか

けられたキリストは、神の意志を信じた。親鸞にとつては、念佛は無碍の一道であつた。日蓮は首の座に坐つても、刀で首を切ることの出来ぬ金剛堅固の信があつた。先驅者は信仰の人である。魂のどん底に、動かぬ力と感激がある。先驅者は智識ばかりの持主ではない正義のために殉じ、道のために死する信仰の持主である。

何時の時代でも先驅者は必要である。そして先驅者は必ず偉大である。

先驅者たれ。先驅者たれ。同胞よ！

智識が足らんと謂ふこと勿れ。先驅者の必要がないと云ふこと勿れ。村も町も物質を中心に立て、権力を得ることを目的とした社會は行きつまつてゐるではないか。

※ 平和 來 ！

我飯室の村に平和が来た。一村の平和は小さい事實と見てはならない。これが天下に及せば、天下の平和なる所以である。

飯室は學校問題について争ふこと此處に三十年であつた。一校派對二校派の争ひがそ

れである。それが九月の末つた二目をもつて、解決して現在のままで眞の一校となり永遠の平和が来たのである。此處二三年學校が一校たるべきことは、一人として疑ふ者がなかつたのに、唯長い争ひの間に出来た種々の感情問題のために引きずられて度々の解決を企てた者に空しく手をひかせたのである。解決の根本動力は何か。私は答へて、若き者の奮起にあると云はふ。

村内に散る若き目覺めたる小き先驅者たちは、一校派二校派の黨派を眼中にわかす一村の平和を目標に種々な批難と、攻撃とを甘んじて受けながら、目覺めざる民衆の先頭に立つて、或は説き或は計り、遂に飯室の維新の機運を造つたのである。保守派即ち戰鬪派たちが、一校派は城によつて、一校を守り二校派の勢衰へて自然消滅の時を待ち、二校派は捲土重來一校派の城廓を攻落すことを目的としてゐる間、よし學校は一校たりとも眞實の平和は來ないのである。其處に、劍を捨て、城を毀ちて、教育の尊重を説き、愛の村を將來さすために、出て來たのは主として青年をもつてなされた進歩派であつた。彼等小き先驅者が、幾度か手を焼き、異議者として間者として

苦しい立場の中にありながら遂に其目的を實現したことを感謝し讃美するのである。平和來！平和來！と叫ばれた夜、飯室村の萬歳の三唱せられた時、此處數年苦しんで其素志を貫徹した人たちの眼中には、唯、無言の涙があふれてゐた。戦ひに乗じて、愚かな民衆を煽て、自己の權力慾を満足してゐた人たちは、自己の立場を失つてしまつた。平和を好まぬ極少數の人たちの如きは如何なる死物狂ひをしやうとも、遠らず社會的に葬り去られる人である。今や賢明なる議員諸君の努力によつて校舎の増築、運動場の擴張、校舎の移轉等は決議せられたのである。私は若き先驅者に滿腔の誠意を以つて感謝の意を表するのである。

天下暗憺として妖雲たなびく

世界的に人の心は荒み、信仰をかき、道徳は守られず、金を得ることへのみ心を使つて、百鬼横行の有様ではないか。身は高官に居れども心高官におらず、身は華族におれども心は匹夫にねざる者、世に大道濶歩してゐるといふではないか。代議政治の神

聖が何處にあるか。今の道徳を救ひ、宗教を救ひ、政治を救ふためには、正義の血潮高鳴る先驅者が必要である、

先驅者となれ。然らずば、先驅者を生むために、偉大なる先驅者を生むために、飢餓如く如く義を求める清き民衆となれ。

清き熱烈なる民衆によつて先驅者は生れ、先驅者によつて汚れたる民衆は救れる。

全てを善意に

疑へば皆チボ

大阪驛にスーッと汽車が這入つた。私も急いで乗つた。車中がやつと落着いた頃に、車掌が『皆様チボに御用心を願ひます』と云つて通つた。静になつた乗客は急に、眼を見はつた。そしてこの車中にもチボが居るかのやうに疑ひ深い用心をしはじめた。

時計、財布と手をあて、見たり、よく藏つたりした。私は人の心の動きをちつと眺めてゐた。すると五十ばかりの太った男が、『チボの奴は大概紳士らしく化けてゐて、洋服でも着て……』と車中に通るやうな聲でどなつた。群衆たちは、さうだと云んばかりに賛成の顔色を見せた。そして洋服を着た人を一人づつ異様な眼着きで見渡しはじめた。私の上にも、恐ろしい眼が前後から向けられてゐる。冷たい空氣、人間たちが皆が疑ひあつた恐ろしい空氣が、堪へがたく不快であつた。けれど汽車が神戸に着かない内に大概是眠つてしまつた。私の前に眠つてゐた三十歳の商人らしい男も、一寸眼が覺めるとすぐ、腰の財布に手をかけて見た。汽車は、唯闇の中を走る。

※ 利己主義の上に立てば

利己主義を、自分の中心に立て、考へると一切の人は皆、自分の敵に見わる。他人も亦、自分のやうに、自分勝手な利己主義で動いてゐるやうに見わる。

※ 天の理に曇は無く、人の心に疑ひあり

太陽の光が、雲の有無に關らず常に明な如く、天の理に曇はない。天地一貫、古今不變、宇宙の眞理に動はない。誠はこれ、神明を貫く、無碍の光明である。信心！信心！信心！信心とは、不淨な、變り易い人間心ではない。絶對無限の、天地一貫の生命が人間心の其中に徹底したのである。信心とは、まことのこころである。信する心である。疑ふ心は、これ人間の有つ醜い心である。信の心は天地古今を隈なく照して及ぶところはない。人の心にのみ、疑ひの曇がある。

※ 若き者の祝福は

若き者の祝福は、數限り無く多いのだらうけれど、若き者の有つ一つの美しさは『理解を有つ』ことである。理解を有つとは、信の心の早わかりである。深く疑ひ得ない心である。よし假令、深く疑ひ得ない心のために、幾度か心の直からざる者のために

欺かれやうごも、其ために、陥入れられて無慘な損害をば受けやうごも、神の前の審判の前に立つた時は、其正しさを褒めらるべき者である。若き日の生命は、全てに對して、理解を持つが故に、心の傷のために他人を見れば、盜賊と見よと云ふ老ひたる生命よりも、祝福さるべき者である。

□

火のない所に煙は立たぬ。と云ふけれど煙だと思つたことがすぐ火のある證據ではない。人間の眼は霧を煙とも、砂煙を煙とも、見誤り、時には何もない處に煙さへ見とめるのである。況んや心の眼で見る無形の煙をやである。

何事も善意に解釋することです。其人と自分との立場を換へて考へることであります。理窟はごうでも言へるでせう。けれど理窟通りには所詮行かれない私たちです。彼を悪人だと言ふ前にも、今一通同情をもつに考へて見ることです。人は皆自分の性格によつて行ひが出て來るのです。理窟から云へば、悪いとは知りながらも、強い深い自分の内から湧く力によつて出來た悪かもしれません。何といふ私の性格だらう

と泣いてゐるかも知れません。

私は私の性格の弱さに泣き、人は人で自分の性格の醜さについて泣き、そして、互に人のことについては善意をもつて宥し、宥されて生きてゆくことが、淋しい者の集つたこの世界での生き方です。

私たちが宥し信じあふ所には、友人も親子も兄弟も皆善人です、疑ふ所呪ふ所其處には、悪人ばかり出來るでせう。他人を信じ他人のしたことを善意に解釋することは、其人の魂が美しいからです。假令相手がほんとに悪人であろうとも、信する心の持主は清い尊い方なのです。

若し自分の心の汚れから、他人を疑つて悪いとか善生だとか云つた後、其人が心の清い方であつたら何としませう。大石良雄を酷たど云つて罵つた烈士喜劍は、良雄の忠義を知つた時、切腹して地下に言譯けしましたけれど、こんな強い事の出來ない私たちは、疑つた方に何と云つて詫びませう。其人の名譽をどうして取返へしませう。善意に人を見る人は、一度や二度馬鹿な目を見たとても、魂の清き者は、三千世界の

諸佛諸神によつて守れ、私の新しく出来る運命の上に、祝福が加へられます。

虚榮の惡魔

※ 若い女の言分

若い年頃の女の大抵は『百姓は嫌いです』と自慢さうに言つてゐる。この一言で大體今の時代が知れてくる。此一口にどんな惡魔が這入つてゐるかを考へて下さい。女たちの心の中で——表面の理由は何であつても——言ふでせう。

『体が辛いから……』

『勉強しても、何の役にも立たぬから……』

『虚榮が満足されないから』

『奇麗にしてゐられないから』

淺慕な、この心の底よ！ 人間の求めてゐる幸福、眞の幸福は、そんなところには無

いぞ。体が辛い……それは怠けたいからだ。勉強は鼻のさきにぶら下げる爲ではない

ぞ。結婚は虚榮欲満足のためではないぞ。皆な惡魔の聲だ。貴女の腹の中に巢くう惡

魔の聲だ。貴女は、お茶も習つたろう。花も知つてゐやう。高等女學校も卒業した

でせう。けれどそのために、百姓の妻になつた時。木樵りの妻になつた時。そして全

て貴女が見て以つて賤しとし、嫌だと思ふ職業を持つてゐる男の妻になつた時、教育

のない女たちよりも、妻としての貴女が、立派でないならば、私は貴女の受けた教育

を疑ひます。教育は、人間的活動の根本的智識を得る手段であり、人格を造る方法で

す。若し教育が世の所謂奥様を造ることにあるならば、教育は受けなくてもいいと思

ひます。教育は、労働を厭ふことを教へたでせうか。虚偽の幸福を求めることを教へ

たでせうか。虚榮の貴女を目的としたでせうか。

若し貴女に眞の教育があるならば、貧しき者を富ませ、愛に飢れた者を飽せ、悲しき

者を救ひ、惡しき者を善に移らせる力がある筈です。乃木將軍の夫人靜子様のやうに

木村重成の妻のやうに、北政所のやうに、鮑宣の妻少君のやうに、貴女の生命がほんこの教育を受けてゐるならば、貴方は、ほんこの母として、ほんこの妻として、そしてほんこの愛の体験者として生きねばなりません。でないならば、貴女の受けた教育は、貴女の運命を正しく育てないで、悪魔の呪ひがひそんでゐます。今の内に悪魔を見出した方は、追拂ひなさい。悪魔のゐる間、假令貴女のお顔が美しい、財産も學問も地位もある人の所に嫁入つても、貴女の幸福はありません。悪魔を追出して、赤裸々な貴女にならなさい。愛を根本に立てた生活、犠牲を出発點にした貴女の生活のみが、ほんこの生活です。時によつたら、箆笥の着物一枚残らず、賣つても心から感謝し、病める夫と、若き子を育てるためには、帯紐とがす、夜を晝に繼いで働くことさへ心から有難いと思ふ貴方が見出せた時、貴女はほんこの幸福者でございます。

※ 悪い夢

虚榮といふ悪魔は女子ばかりの持物ではない。若し人生から虚榮の悪魔を追逃したら如何に眞面目なものになるだらう。

金持ちになりたい、學者になりたい、高官になりたい、それ等が若し、自分の虚榮欲を、満足したのであるならば、學者になつたことに、高官になつたことに、金満家になつたことに、どれだけの價値があろうぞ。さうではないと言ふことを休めよ。米國に渡つて金をつかんで來た者が日本に歸つて何を第一にするか。善美をつくした宴會、金に飽した普請が其仕事の全部ではないか。金の波が、社會をうづまく時、天下の青年は何處に走つたか。中學卒業者の志望は實業界に集つたではないか。

金持ちらしい風、賢さうな風、信仰家らしい風、道徳家らしい風「らしい風」をしてゐる者があまりに多い。私も其一人だと思ふ時、堪へ難い淋しい心になつてしまふ無い袖の振つて見たい私たち、腐れた心を蓋をして、一時でも過したい、人に知られないやうに胡麻化さうと思ふ私たちの生活は見つめれば見つめるだけ、どんなに、悲しい一生でせうか。或所に昔から庄屋を勤めた金満家がありました。三四年前から

大普請が始まつて、それはそれは大きな家が出來ました。ところが近頃になつて、急に、土藏を賣り、造作のまだ整はぬ家をも賣りに出して、家を疊んで、廣島に出られました。人々は口々に笑ひました。けれど私は、其御主人に感心しました。人の話では、數萬といふ負債が出來たとか、それも御主人の計畫の的外れになつたものが原因なのです。普請を始められた時には、勿論そんな事情はなかつたのに途中から出來た事です。そんな負債の出來た時、一時の虚榮のために、小細工をする更りに、思切つて、他人の批評も何も氣にたかないで、あんな處置をお取りになつたことを誠に賢明な仕方だと思ひます。笑つてゐる人たちが賢いでせうか。笑れる者が優れてゐるでせうか。

虚榮のために、百圓の借金で、胡麻化しついで二百圓、三百圓、そしてどうくどうにも出來なくなるのだ。しかも其間、悪い夢に襲れたやうに苦しまねばなりません。きつと身を亡す者は、虚榮といふ惡魔につかれ人たちです、濃化粧に自分の美しさを誇うとする女に、何て生命の光が見出せませう。金で買つた位や袈裟を誇うとする僧

侶に、佛の愛が知れませう。

※ 物置の大掃除

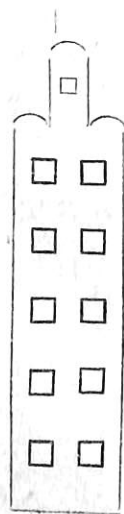
運動會の爲めに、物置が亂れて汚くなりました。埃と反古と炭と木片と机と種々な道具とで足を入れるところもないほど穢くなつてゐました。子供たちが一切中にあるものを取出して、塵や埃を集めて出したら、小山のやうになりました。それには火をつけて焼き、中に入れる物は整然と結めたので半日時間はかかつたけれど、氣持のいい物置になりました。人の心も此通だ。私はつくづく感じました。室の外から見た時、その室内の汚れは見えて來ません。掃除は室の外の壁を美しく飾ることでせうか。内は満足出來るでせうか。馬鹿氣たほど單純な私の譬です。けれど、私たちの實際を見つめる時『汚れたる物置』の名が相似しいではありませんか。我を忘れて、來る日來る日を暮してゐる時、私たちは唯壁を美しく塗りかへることにのみ心を奪れて、汚れ

た心の中をのぞき、室の中を整理することを忘れてはなりませんでせうか。美しく見る客間でも、額の裏をご覽下さい。畳の下をごらん下さい。きつと汚れてゐるでせう。心の大掃除をせねばなりません。八萬四千の蠅虫をうよくこわかしてゐる心の中を、虚榮の衣服と、顔色と、言葉とをもつて包み、其上に、脂白粉をつけて得々としてゐるのが私たちではありませんか。孔といふ孔、口と云はず目と云はず、全ての孔から云ひやうのない臭氣を出してゐるとは何といふ醜さでございませうか。孔からは蠅がはい出して、ごうごうにか胡麻化して行かうとする人たちの内で、私は其心の掃除をなさる貴女の生活の幸福が思れます。

貴女の花顔の墨が見えないやうに、心の墨も見えにくい。貴女の生命を洗うがために生れた、光明の指揮によつて生れた光明によつて、そして世中の多くの目覺めたる方によつて貴女の生命の掃除を励み下さいませ。

※ 苦しいけれど離れて見やう

虚榮の欲は私たちの魂に強い悪魔として喰ひ入つて、追出すことは困難です。けれども私たちの苦しみは、この悪魔のためなのです。此悪魔に忠實にしてゐる間、私の魂は苦まねばなりません。そして階段を上るやうに、段々と物足りなさど、罪惡どが増して行きます。ごうごう私に腐れ果てた時、悪魔は凄い笑顔を造ります。私たちが若し離れにくい悪魔を追出して、眞實の私になつた時、其處には、醜い、臭氣の鼻をつく私を赤裸々に見て泣く涙の私が見出せるでせう。其時新生の誕生です。



安佐郡飯室村
廣島山陽中學校
廣島市境町
佐伯郡沖村

新
同
胞

全全全全全全全全全全全全全全全全

原木松元
下木
カ本
渡ッ
エ様
様様様

栗酒元松栗新池新中名久石香
元井木本原出田谷村柄留井浦
彌三十一政海覽佐正島善三
郎整錄夫美平一市基之牧之郎
樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣

全全全全全全全全全全全全全全全全
一金壹圓
一金壹圓貳拾錢
一金壹圓拾錢
一金壹圓

團
費
納
附
者

友若藤川藤金下藥木松岩岡岡藤谷谷岡
近井手井森田師山田見本野井口野
杉武み節太根正純
史武つ節太根正純
郎惠夫登昇よ二郎雄子郎肇要勉讓めめ
樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣樣

□ □ 卷 末 に □ □

□ 毎卷色々な事狀の爲に配本が後れて皆様に申譯けがありません、けれど私が衷心に於いては決して皆様の御期待にそむかないやうにこの決心が御さいます、有縁の精神的同情が毎

日下さる御言葉に對して心からの感激をもつて、ペンを取つております、

□ 書いてあることについて又皆様の日常について 色々な不審や、疑ひがありましたら、お出し下さいませ、誌上ででも、私信でも御答へ致します、

□ 同胞談話室の御利用を願ひます原稿がさつぱり出ません、手短かに成るべく多數お出し下さい、

□ 光明園は營利の目的でもなければ、賣名の団体でもありませんから一概に大きくなることも必要ですけれど、私の云ふことに共鳴して下さる方は、そして眞に信仰に入つて下さる方は一人でもほしいと思ひます、月々の光明は可成多數の人にお見せ下さい、

□ 秋深く虫の音もうすれ、紅葉色づく頃になりました、物悲しい人ノ懐しい此頃、ほんさに貴方の生命ノ永遠への誕生のために、靜に默想し、救れた感謝に貴方を捧けて新しい活動にお入り下さいませ、

大正十年十一月一日印刷
大正十年十一月五日發行

(非賣品)

廣島縣安佐郡飯室村一五四番地
編輯人 住 岡 狂 風

廣島市新川場町一三三番地
印刷人 三 宅 正 義

廣島市新川場町一三三番地
印刷所 三 宅 印刷 所

廣島縣安佐郡飯室村一五四番地

發行所 光明園本部